総理演説は何故、未来志向になったのか？

ー近年の未来言説の特徴ー

橋　本　武
（一般財団法人日本開発構想研究所 研究主幹）

はじめに

われわれは、何となく「政治とは未来を語るものである」と思っていないだろうか。

しかし、戦後の政府 4 演説（総理大臣の施政方針演説と所信表明演説、外交演説、財政演説、経済演説）を見る限りでは、このような「未来志向」はいつの時代にもよく見られた現象というわけではなかった。それどころか、1990 年代以後という比較的最近になって目立ってきた現象に過ぎなかったのである。このことを筆者は 2 年の「国会演説は未来志向になったのか？」（http://www.ued.or.jp/media/34/20121106-mirai.pdf）という論考で明らかにした。ここで「未来志向」とは、「現在」という単語よりも、「未来」又は「将来」という単語の方がはるかに頻繁に使用される状態のことである。

その後、都道府県知事の議会演説を分析したところ、概ね 2000 年以後に同様の未来志向現象が見られることも分かった。

本稿は、この未来志向という現象に関する続編である。

ここでの基本的な問いは、「内閣総理大臣の国会演説は何故、未来志向になったのか」である。いろいろな答えが想定される。例えば、「人口減少・高齢化、国家財政の悪化、地球環境問題など長期の未来を考慮すべき政策課題が増えてきたからである」という答えにはかなりの説得力があるように思うが、意外に「政策課題というよりも、単なるレトリックとして頻繁に使われるようになったにすぎない」のかも知れない。しかし、仮にレトリックであるにしても、何故そういうレトリックが多用されるようになったのかという更なる問いが発生する。

答えと一口にいっても、何に照準を合わせるのかで、政治・行政学的な答え、経済・財政学的な答え、社会学的な答えなど様々なものがあるだろうし、それぞれに表面的な答えから深層的な答えまで複数のレベルがあろう。筆者の関心は、前者については社会学的な側面、後者については、感覚的にいえば、表面的な答えと深層的な答えの間ということになる。

いずれにしろ、この問いに答えるためには、もっと素材をそろえる必要がある。本稿は、この素材づくりという役割の一端を担うものであり、その目的は、国会演説の内容を分析して、「未来の言説のうち、近年になって増えたのは、どのようなタイプの言説か」という問に答えることである。

もちろん、この点が明らかになっても、「国会演説における未来志向が近年高まっているのは何故か」という基本的な問いに対しては、表面的にしか答えられない。しかし、深い原因を探る手がかりにはなることは間違いないだろう。このように、本稿はこれで完結するものではなく、さらに書き継ぐという前提に立つものである。

分析は、前回と同じ計量テキスト分析により行う。分析ツールとしては、樋口耕一氏(立命館大学)の開発したフリーソフトウェア KH Coder を使用する。

1. 未来に対する関心の強度

1-1　現在志向から未来志向へ

まず未来に対する関心の強度について改めてポイントを絞って検討する。

公共政策が過去、現在、未来という時制とどのような関係にあるのかを考えると、すべての公共政策は、現在と未来という 2 つの時制を必ず含んでいることが分かる。何故なら、公共政策とは必ず、現在の状態を未来において改善するという構造になっているからである。このように公共政策においては、過去よりも現在と未来の 2 つの時制が重要になる。本稿では現在と未来に絞って検討する。

本節では、両時制に対する志向の強度がどのように変化したかを確認する。

検索単語は、現在等については「現在」「今」「いま」の 3 単語、未来等については「未来」「将来」の 2 単語とし、現在等と未来等の出現率（文字総数に対する検索単語の出現万分率）の経年変化を見たものが表 1 である。未来等と現在等の変化傾向はかなり似ているように見える。両者の相関係数は 0.678 で、1%有意である。未来等と現在等は、同期的に変化したと言えよう。

そうした同期的変化の中で、いずれの出現率が大きかったかを見ると、90 年代前半までは一貫して現在等の出現率が未来等の出現率を上回っていたが、90 年代以後この関係が逆転し、未来等の出現率が現在等の出現率を上回るようになった。但し、このままでは、「現在、今、いま」と「未来、将来」の単語としての使われやすさの違いの影響が除去されていないので、これを除去した結果が表 2 である。プラス側が未来志向、マイナス側が現在志向であり、絶対値が大きいほど志向性が顕著なことを意味する。これを見ると、90 年代前半までは基本的に現在志向、90 年代以後は未来志向であり、例外は 60 年代の未来志向だけだったことが分かる。戦後の時間志向の変化に係る基調は、概ね 90 年代前半と後半を境界とする「現在志向から未来志向へ」であったと言っていいだろう。

図 1　現在等と未来等の出現率の経年変化

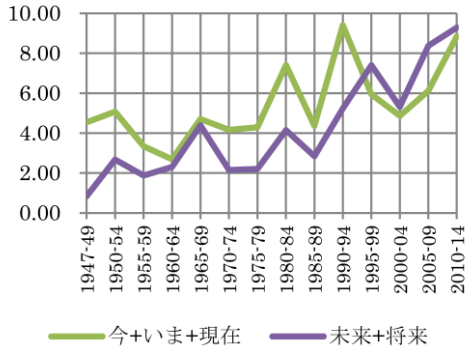
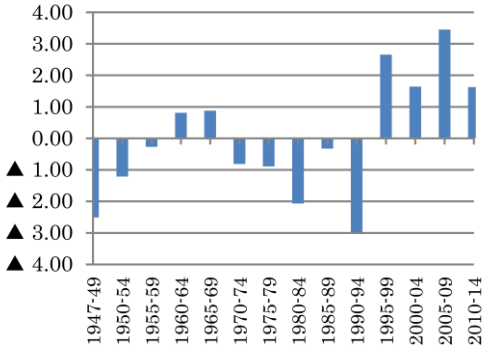


図 2　現在等と未来等の出現率の差の経年変化



注：プラスは未来志向、マイナスは現在志向

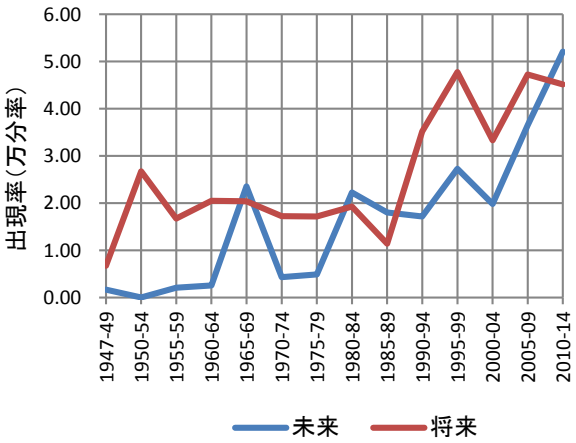
1-2　未来と将来の違い

本稿では、未来と将来を区別しない。しかし、細かく見れば両者には違いがあるので、その同異を見ておく。

まず、意味については一般的に、未来は将来よりも現在に近いニュアンスがあり、未来の方がより遠くにある感じがする。また、未来は客観的、抽象的な感じが強く、将来の方が主観的、具体的な感じがする。

次に、両者の出現率の経年変化を見たものが図 3 である。両者の相関係数は 0.731（1%有意）であり、同期的に変化していることが分かる。ただし、将来の方が以前から安定して使用されていた、出現率の急増は将来の方が先行したとう違いも認められる。

図 3　未来、将来の出現率の経年変化



２．未来の内容

2-1　総理演説の分析方法

以上の確認的な検討を踏まえ、今回の目的である「未来の言説のうち、近年になって増えたのは、どのようなタイプの言説か」という問の解明に進む。

検討方法は、「未来又は将来を含む文を抽出し、これらの文に含まれる単語の出現回数を調べる」というものである。この方法は、一つの文の中に含まれる単語は相互に関連があり、同時に出現する頻度が高いほど両単語の関連は深いという前提に立っている。この前提は、同時出現回数が極端に少ない場合（何回以上であればよいかを具体的に特定することはできないが）を除けば無理のないものと考える。

以下、時制としては未来と現在の 2 時制、また 1 章と同様に未来を意味する単語としては「未来」「将来」の 2 つ、現在を意味する単語は「現在」「今」「いま」の 3 つとする。

未来の内容を表す単語としては名詞、サ変名詞の 2 分野を検討する。それぞれについては、主要な政策分野、時制との関連性、出現回数などを勘案して、表 1 のカテゴリー、検索単語を選定したが、これらは決して網羅的、体系的ではない。また、カテゴリーの数が増えすぎないようするため、同一カテゴリーの中に複数の検索単語を含めているものがあるが、

表 1　カテゴリーと検索単語

分類	カテゴリー	検索単語
名詞	税財政	財政、税制、歳入、歳出
	経済	経済
	社会保障	保障、年金、福祉
	教育	教育
	科学技術	科学、技術
	農林水産業	農業、農村、農民、農家
	国土・地域	国土、地域、都市
	社会資本	道路、鉄道、港湾、空港、新幹線、社会資本
	国家	日本、国民、我が国、わが国、国家、この国
	世界	世界
	人類・地球	人類、地球
	子供	子供、子ども
	青少年	青年、青少年
	世代	世代
	対外的	韓国、アジア、日中、首脳、日韓、太平洋、大統領
サ変名詞	進歩	進歩
	発展	発展
	成長	成長
	安定	安定
	変化	変化
	改革	改革
	継続	継続、引き継ぐ
	実現	実現
	切り開く	切り開く
	安心	安心
	不安	不安
	安全	安全
	希望	希望

このようなカテゴリーは出現回数が多くなりやすい点には注意が必要である。

以下の記述は、検索単語ではなく、カテゴリーを単位とする。また、カテゴリーに含まれる検索単語が一つの場合でも、カテゴリーという表現を用いる。

検討期間は 1955 年から 2014 年までの 60 年間、時期区分は 1955-74 年（第 1 期）、1975-94 年（第 2 期）、1995-2014 年（第 3 期）の 20 年間ずつの 3 区分とする。時期区分を 3 分する理由は、あまりに細分化すると同時出現数（同時出現数の定義は 2-2）が少なくなってしまうこと、また本稿の関心は 90 年代前半までとそれ以後の違いにあるので区分をあまり細分しても意味がないことである。また、1954 年以前を対象外とするのは、20 年間×3=60 年間からはみ出てしまうとともに、演説の言葉使い等が現在と相当に異なるからである。3 つの時期区分はほぼ、高度成長期、安定成長・バブル期、ポストバブル期に相当し、この点でも相当の必然性があることになる。

分析結果は、表 1 から 4 のとおりである。時制は、未来・将来である。各表の上段が名詞カテゴリー、下段がサ変名詞カテゴリー（「切り開く」は動詞で例外）であり、名詞カテゴリーについては、政策分野を表すものを左側に、それ以外の名詞カテゴリーを右側に配置したが両者の違いは厳密なものではない。

2-2　影響力、出現率、関連性強度の定義と計算結果

あるカテゴリーの未来・将来に対する影響力とは、「未来・将来という単語のいずれかが検索テキスト全体で出現した回数」に占める「あるカテゴリーに含まれる検索単語のいずれかと未来・将来という単語のいずれかが検索テキスト中のいずれか一つの文のなかに同時に出現した回数（同時出現数）」の割合のことであると考えていいだろう。本稿では、そのように影響力を定義する。

また、影響力の内実を分析するため、影響力を「そのカテゴリーの出現しやすさ（出現率）」と「そのカテゴリーと未来・将来との関連の強さ（関連性強度）」の 2 つに分解する。以上の関係を簡潔に表現したものが下式である。

$$\underbrace{\frac{\text{同時出現数}}{\text{未来等出現数}}}_{\text{影響力}} = \underbrace{\frac{\text{名詞等出現数}}{\text{文字総数}}}_{\text{出現率}} \times \underbrace{\frac{\text{同時出現数} \times \text{文字総数}}{\text{名詞等出現数} \times \text{未来等出現数}}}_{\text{関連性強度}}$$

各カテゴリーの影響力、出現率、関連性強度を計算したものが、それぞれ表 1、表 2、表 3 である。いずれの表も上段が名詞、下段がサ変名詞であり、名詞、サ変名詞ごとに上位 4 位までを網掛けしている。以下、影響力、出現率、関連性強度の順に計算結果を検討する。

- 影響力

名詞カテゴリーについては、国家、経済が常に上位 4 位に入っているが、国家や世界といった「大きなカテゴリー」の影響力は次第に小さくなっている。各時期に特徴的なカテゴリーとしては、第 1 期の青少年、第 2 期の科学技術、第 3 期の世代、社会保障を挙げられる。

サ変名詞カテゴリーについては、発展、希望、切り開くが影響力が常に大きいカテゴリー

である。各時期に特徴的なカテゴリーとしては、発展から改革へという時間的な移行が認められることと、第 3 期に入って安心、不安といった心理的なカテゴリーの影響力が大きくなったことを挙げることができる。

- 出現率

出現率については、名詞カテゴリー、サ変名詞カテゴリーともに、3 つの時期で上位 4 位まではほぼ一定していて時期的な特徴は少ない。影響力の変動に対しては、次の関連性強度の変動の方が大きく影響したものと考えられる。

- 関連性強度

名詞カテゴリーについては、子供が常に上位 4 位に入っているが、上位 4 位までの変動が激しい。各時期に特徴的なカテゴリーとしては、第 1 期の青少年、国家、第 2 期の科学技術、社会資本、第 3 期の社会保障、税財政を挙げられる。

サ変名詞カテゴリーについては、切り開く、希望が常に上位 4 位に入っている。各時期に特徴的なカテゴリーとしては、第 1 期の進歩、不安、第 2 期の発展、継続、第 3 期の不安、安心を挙げることができる。

2-3　1995 年以後の未来言説の特徴

単語使用の観点から見た、第 3 期の未来言説の特徴は、次のようにまとめられる。

影響力が増加したカテゴリーは、税財政、社会保障及、世代、改革、安心、不安などである。このうち、出現率増加の影響が大きいのは世代、改革であり、関連性強度増加の影響が大きいのは税財政、社会保障、安心、不安である。

出現率の増加と関連性強度の増加を比べると当然のことながら、関連性強度の増加の方が未来志向が高まったという感覚にフィットしやすい。このため、第 3 期の未来観の特徴としては一般に、税財政、社会保障、安心、不安といった単語で意識されているものと考えられる。筆者もそのように感じていた。

また、出現率増加の影響が大きい世代、改革のうち、世代はいずれの時期においても関連性強度が相当に大きいので、わずかな出現率の変化でも影響力を大きく変化させる。世代は、税財政、社会保障、安心、不安と比べて第 3 期の特徴であるとはあまり意識されていないように思われるが、こうした点を踏まえれば第 3 期の特徴の一つと考えられる。世代は、税財政などとは異なって意識に上りにくい特徴なのである。世代と類似したカテゴリーに子供、青少年があるが、これらは世代とは逆の変化、つまり、影響力が大きく減少するという変化を示した。子供、青少年がライフステージによる分節であり、世代が主としてコーホートによる分節であることを考えると、ここにライフステージからコーホートへという分節方法の変化を認めてもいいのかも知れない。

以上、第 3 期の特徴的なカテゴリーは、①税財政と社会保障という政策的カテゴリー、②安心と不安という心理的カテゴリー、③世代というコーホート的カテゴリーの 3 つに区分することができる。

３．現在の内容及び未来と現在の違い

3 章では、未来に係る多角的な知見を得ることを目的として、現在についても未来と同様の分析を行い、両者を比較検討する。

3-1　現在の内容

2 章で未来に対して行ったと同様の分析を現在について行った結果が表 4 と表 5 である。表 4 は影響力、表 5 は関連性強度を示している。出現率は時制に無関係なので、表 2 の未来の出現率と同じである。

なお、本稿は、未来志向の原因解明を目的としているので、選択したカテゴリーや検索単語は、意図したわけではないが、結果的に現在よりも未来との関連性が大きくなるものが多いと考えられる。したがって、計算結果も未来にバイアスがかかったものになっている可能性が高い点には注意が必要である。

- 影響力

名詞カテゴリーについては、国家、経済、世界が常に 1 位、2 位、3 位になり、極めて安定的な構造をしている。各時期に特徴的なカテゴリーは、明確ではない。

サ変名詞カテゴリーについては、①未来で見られた特徴、すなわち、発展から改革へという移行、②第 3 期における心理的カテゴリーの影響力の増大という特徴のいずれも現在についても見られる。

- 関連性強度

名詞カテゴリー、サ変名詞カテゴリーともに時期によってかなり変動している。特徴的な名詞的カテゴリーとしては、第 1 期の国土・地域、経済、国家、税財政、第 2 期の社会資本、世界、第 3 期の人類・地球を挙げることができる。また特徴的なサ変名詞的カテゴリーとしては、第 1 期の継続、実現、成長、第 2 期の改革、安心、第 3 期の切り開くを挙げることができる。

- 1995 年以後の現在言説の特徴

現在においても、未来と同様、第 3 期に心理的カテゴリーの影響力が増した。しかし、その主たる増加要因は、未来のように関連性強度の増大ではなく、出現率の増大である。この点で未来と明確には異なる。心理的カテゴリーは、もっぱら未来に対して作用したといっていいだろう。それ以外の顕著な特徴を第 3 期に見出すことは難しい。

3-2　未来と現在の影響力の違い

次に、各カテゴリーの未来に対する影響力と現在に対する影響力にどのような違いがあるかを計算する。結果は表 6 であり、プラスは「未来に対する影響力＞現在に対する影響

力」、マイナスは「未来に対する影響力＜現在に対する影響力」を表し、絶対値は未来と現在の差異の大きさを示す。なお、関連性強度について同様の計算を行っても、結果は影響力についての計算結果と一致する。

現在に対して未来の優越度が大きいカテゴリーは、子供、科学技術、青少年、切り開く、継続、希望等である。反対に、現在の優越度が大きいカテゴリーは、世界、社会資本、変化、実現等である。第 3 期に急激に未来の優越度が大きくなったカテゴリーとしては、対外、安定を挙げられる。対外については、この時期から日韓関係、日中関係等で「未来志向」がキャッチフレーズとなったことが主たる原因である。

このように個々にはいろいろな特徴が見られるものの、一貫した顕著な特徴は見出しがたい。

４．暫定的な結論と今後の方向

未来の言説のうち、近年になって増えたのは、どのようなタイプの言説か。

この問いに対する本稿の結論は、①政策的には税財政と社会保障に関する言説、②安心と不安という心理的な単語を含む言説、③世代というコーホート的な単語を含む言説、ということになる。

また、未来に対して影響力を増した原因は、税財政、社会保障、安心、不安というカテゴリーにおいては未来との関連性の増大、世代というカテゴリーにおいては関連性の増大ではなく、使用頻度の増大であることも分かった。

これらが本稿の結論である。

もちろん、これらの結論は暫定的なものでしかない。方法論的に限っても、改善すべき点が少なくない。しかし、はじめにでも述べたように、本稿はこれで完結するものではない。今後も書き継いでいくつもりである。その方向は、方法論の改善以外にも大きく 2 つある。

第 1 は、データ分析の継続である。まずは、税財政、社会保障及、安心、不安、世代といったカテゴリーが具体的にどのように使われたのかを丁寧に読み取る必要がある。また、第 3 期以外の期間にも目配りする必要がある。例えば、第 2 期(1975-94 年)にも、科学技術と社会資本という関連性強度が急増したカテゴリーがあるが、その原因は何か。

第 2 は、今回の分析結果の背景を考えることである。筆者の当面の関心は、こちらにあるので、やや詳しく記す。

上記①と②は、「未来に対する不安」というワードに集約できるだろう。ここで政策分野を示唆する単語を外した理由は、未来志向は、いわゆる政策課題の変化だけで生じたのではなく、ある形の事象を重大視するようなメカニズムが国政において広く流布したこととセットになって発生したのではないかと予測するからである。さらに、このメカニズムが未来

や不安と親和的で（だからこそ、税財政、社会保障の分野で顕著であった）、かつ第 3 期に顕在化したのではないかと予測するからである。仮にそうでれば、税財政や社会保障以外の政策分野においても、何かのきっかけでこのメカニズムが作動すれば、未来志向型の重要政策課題が発生する可能性があるということである。未来、不安というワードから、このメカニズムとしては直ちに、U. ベックのリスク社会概念が思い浮かぶ。ベック流のリスク論がメカニズムの骨格をなすことはおそらく確実であろう。しかし、リスク論ですべてが説明できるのか、できないのか。

上記③は、「世代意識の顕在化」というキーワードになろう。ここにも、「未来に対する不安」と同型の問題が考えられる。世代意識の顕在化は、租税負担や社会保障をめぐる世代間格差、世代間対立という政策分野限定的な現象に過ぎないのか、それとも「ライフステージからコーホートへ」と表現しうるようなメカニズム変化があったのか。そうであれば、そのメカニズムとはどのようなものか。

さらに、「未来に対する不安」と「世代意識の顕在化」は、独立の現象なのか、関連する現象なのか。関連するのなら、それはどのような関係なのか。その場合、未来を内在化している「未来に対する不安」と内在化していない「世代意識の顕在化」の間にはどのような違いがあるのか。

こうしたメカニズムが国政において広く流布しているならば、それを活用（悪用?）してメカニズムが作動しやすい形に政策課題を意図的に構築すれば、課題の優先順位を上げることが可能になるだろう。そう思って見ると確かに、未来に対する不安型の政策課題は、意図的か否かは別にして近年、顕著に増えているように思われる。世代意識型の政策課題についてはどうであろうか。

最後はずいぶんと話が大きくなってしまった。そもそもの問は、「内閣総理大臣の国会演説は何故、未来志向になったのか」である。なにか、えらく遠回りをしているような気もする。しかし、表面的なレベルでの答えに終わらせないためには、この種の検討が欠かせないだろう。また、最後に書いた幾つかの問いに対しては、筆者が知らないだけで、答えはもう出ているのかも知れない。それなら、その答えを知りたいものである。

まずは、第 2 の方向、上述したメカニズムとは何かという問を念頭において、既存研究のサーベイに取り掛かりたい。上手くいけば、次回はその結果を報告することになろう。

本稿は筆者の個人的見解です。

表2　影響力=未来・将来に対する同時出現率：同時出現数／未来・将来出現数(百分率)

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	0.00	15.71	8.57	4.29	0.00	1.43	2.86	0.00	**65.71**	**14.29**	2.86	1.43	**21.43**	0.00	2.86
1975-94	5.71	**17.14**	6.43	**5.00**	**15.71**	**2.14**	**7.86**	1.43	47.14	10.71	**10.00**	3.57	1.43	5.00	5.00
1995-2014	**9.06**	14.69	**12.19**	3.44	5.94	1.25	3.75	0.31	40.94	5.31	4.69	6.25	0.31	11.25	5.94
全期間	6.98	15.47	10.19	3.96	7.74	1.51	4.72	0.57	45.85	7.92	5.85	4.91	3.40	8.11	5.28

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	2.86	11.43	7.14	11.43	0.00	0.00	0.00	2.86	5.71	0.00	1.43	2.86	5.71
1975-94	0.00	14.29	0.00	5.71	2.14	12.14	2.14	6.43	7.14	0.00	0.71	0.71	6.43
1995-2014	0.00	5.63	4.06	7.19	0.94	15.63	2.19	5.31	6.25	**6.25**	**5.63**	3.13	6.88
全期間	0.38	8.68	3.40	7.36	1.13	12.64	1.89	5.28	6.42	3.77	3.77	2.45	6.60

注：網掛けは1標準偏差以上。以下の表に同じ。

表3　名詞、サ変名詞出現率：名詞、サ変名詞出現数／文字総数(万分率)

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	5.25	24.99	9.64	4.98	4.36	3.09	5.67	1.47	57.00	13.50	1.85	0.23	3.86	0.19	9.80
1975-94	8.50	21.08	6.74	3.80	4.59	1.51	9.93	0.58	51.34	15.90	4.17	0.85	1.12	1.06	7.73
1995-2014	7.84	19.41	9.41	4.79	5.81	1.54	12.39	1.16	50.97	11.52	3.34	3.70	0.45	2.39	8.25
全期間	7.44	21.37	8.52	4.48	5.02	1.91	9.87	1.03	52.58	13.56	3.27	1.83	1.52	1.38	8.44

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	1.85	9.22	6.63	10.91	1.89	1.43	0.42	6.75	0.35	0.08	1.12	3.97	1.97
1975-94	0.35	9.16	2.95	10.86	3.24	13.49	1.12	8.36	0.58	0.90	0.96	4.75	1.25
1995-2014	0.26	5.02	6.16	5.97	2.23	20.26	1.90	11.09	0.92	4.08	2.32	7.37	1.92
全期間	0.68	7.52	5.13	8.92	2.50	13.23	1.26	9.06	0.66	1.97	1.54	5.61	1.69

表4　関連性強度：同時出現数×文字総数／(名詞・サ変名詞出現数×未来・将来出現数×100)

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	0.00	0.63	0.89	0.86	0.00	0.46	0.50	0.00	1.15	1.06	1.54	6.17	5.56	0.00	0.29
1975-94	0.67	0.81	0.95	1.32	3.42	1.42	0.79	2.45	0.92	0.67	2.40	4.20	1.28	4.71	0.65
1995-2014	1.16	0.76	1.30	0.72	1.02	0.81	0.30	0.27	0.80	0.46	1.40	1.69	0.69	4.70	0.72
全期間	0.94	0.72	1.20	0.88	1.54	0.79	0.48	0.55	0.87	0.58	1.79	2.68	2.23	5.88	0.63

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	1.54	1.24	1.08	1.05	0.00	0.00	0.00	0.42	16.46	0.00	1.28	0.72	2.91
1975-94	0.00	1.56	0.00	0.53	0.66	0.90	1.92	0.77	12.23	0.00	0.75	0.15	5.15
1995-2014	0.00	1.12	0.66	1.20	0.42	0.77	1.15	0.48	6.76	1.53	2.42	0.42	3.58
全期間	0.55	1.15	0.66	0.82	0.45	0.96	1.50	0.58	9.70	1.92	2.45	0.44	3.90

表5　影響力=現在・今・いまに対する同時出現率：同時出現数／現在・今・いま出現数(百分率)

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	4.17	22.92	7.29	1.04	2.08	1.04	6.25	1.04	47.92	9.38	1.04	0.00	1.04	0.00	6.25
1975-94	6.53	16.73	2.45	2.86	2.86	2.04	5.31	0.82	35.92	17.14	3.67	0.41	0.82	2.45	2.86
1995-2014	3.90	12.06	5.67	3.55	1.42	1.42	3.55	0.35	35.46	6.38	3.55	2.13	1.06	4.26	0.35
全期間	4.98	15.57	4.65	2.89	2.09	1.61	4.65	0.64	37.56	11.08	3.21	1.12	0.96	2.89	2.25

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	1.04	5.21	7.29	8.33	1.04	0.00	1.04	9.38	0.00	0.00	1.04	3.13	3.13
1975-94	0.00	4.49	1.22	7.76	3.67	14.29	0.41	6.94	0.41	0.82	1.63	2.04	0.82
1995-2014	0.00	2.48	2.48	0.71	2.84	12.41	0.35	4.61	1.77	3.19	2.84	2.84	2.48
全期間	0.16	3.65	2.70	4.60	2.86	11.11	0.48	6.19	0.95	1.75	2.06	2.54	1.90

表6　関連性強度：同時出現数×文字総数／(名詞・サ変名詞出現数×現在・今・いま出現数×100)

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	0.79	0.92	0.76	0.21	0.48	0.34	1.10	0.71	0.84	0.69	0.56	0.00	0.27	0.00	0.64
1975-94	0.77	0.79	0.36	0.75	0.62	1.35	0.53	1.40	0.70	1.08	0.88	0.48	0.73	2.31	0.37
1995-2014	0.50	0.62	0.60	0.74	0.24	0.92	0.29	0.31	0.70	0.55	1.06	0.58	2.36	1.78	0.04
全期間	0.67	0.73	0.55	0.64	0.42	0.84	0.47	0.62	0.71	0.82	0.98	0.61	0.63	2.09	0.27

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	0.56	0.57	1.10	0.76	0.55	0.00	2.46	1.39	0.00	0.00	0.93	0.79	1.59
1975-94	0.00	0.49	0.42	0.71	1.13	1.06	0.37	0.83	0.70	0.90	1.71	0.43	0.65
1995-2014	0.00	0.49	0.40	0.12	1.27	0.61	0.19	0.42	1.92	0.78	1.22	0.38	1.29
全期間	0.23	0.49	0.53	0.52	1.14	0.84	0.38	0.68	1.44	0.89	1.34	0.45	1.13

表7　未来と現在に対する影響力の差：(対未来影響力／対現在影響力)－1

	税財政	経済	社会保障	教育	科学技術	農業	国土・地域	社会資本	国家	世界	人類・地球	子供	青少年	世代	対外
1955-74	-1.00	-0.31	0.18	3.11	-1.00	0.37	-0.54	-1.00	0.37	0.52	1.74	#DIV/0!	19.57	#DIV/0!	-0.54
1975-94	-0.13	0.02	1.63	0.75	4.50	0.05	0.48	0.75	0.31	-0.38	1.72	7.75	0.75	1.04	0.75
1995-2014	1.32	0.22	1.15	-0.03	3.19	-0.12	0.06	-0.12	0.15	-0.17	0.32	1.94	-0.71	1.64	15.74
全期間	0.40	-0.01	1.19	0.37	2.71	-0.06	0.01	-0.12	0.22	-0.28	0.82	3.37	2.53	1.81	1.35

	進歩	発展	成長	安定	変化	改革	継続	実現	切り開く	安心	不安	安全	希望
1955-74	1.74	1.19	-0.02	0.37	-1.00	#DIV/0!	-1.00	-0.70	#DIV/0!	#DIV/0!	0.37	-0.09	0.83
1975-94	#DIV/0!	2.18	-1.00	-0.26	-0.42	-0.15	4.25	-0.07	16.50	-1.00	-0.56	-0.65	6.88
1995-2014	#DIV/0!	1.27	0.64	9.13	-0.67	0.26	5.17	0.15	2.53	0.96	0.98	0.10	1.77
全期間	1.38	1.38	0.26	0.60	▲ 0.60	0.14	2.96	▲ 0.15	5.74	1.16	0.83	▲ 0.03	2.47